

室長を懲らしめようとしたら、
純愛になりました。

第一章 東京は怖いです

東京の人は、何かに追われているのか歩くのがとても速い。時間すらものすごいスピードで流れているような気がする。ぼんやりと空を見上げると、高層ビルばかりが目に入り、自分の存在がちっぽけに思えた。少し立ち止まるだけで、あっという間に人波に呑み込まれる。スマホで地図を確認していると、誰かとぶつかってしまった。

「すみません」

謝ろうと頭を上げたが、衝突した相手はもういない。

「お姉さん、こういう仕事興味ない？」

別の方向から声をかけられ振り返ると、スーツを着た男性が人のいい笑みを浮かべて立っていた。差し出された名刺をつい受け取ってしまう。

「話だけでも聞いてみない？ 時給も奮発するから」

垢抜けない私に声をかけるなんて……これは、もしかしたら危ないスカウト？

ニヤリと笑った顔が怖い。断ったら態度を豹変させそう。うっかり立ち止まったのがまず

かった。

「今、時間がないので」

「じゃあ、明日はどう？」

「急いでいるので、すみません」

私は逃げるようにその場から立ち去った。

しばらく早足で歩いていると、今度はポケットティッシュを渡される。これは使い道があるからと躊躇なく受け取ったが、セクシーな格好をした女の子の広告がついていた。

東京って、怖い。来なきゃよかった。

でもどうしても、あれ以上札幌では暮らせなかったのだ。

どこにいても、何をしていても、最近別れた元彼との思い出が浮かんできってしまうから……

生活する場所を変えたとはいえ、心の傷はそう簡単には癒えない。けれど、私は過去を忘れて生まれ変わりがかった。

なんとか待ち合わせの恵比寿駅にたどり着いて、仕事帰りの会社員の姿を眺めながら友人の到着を待つ。

平日だというのに、駅周辺はお祭りでもあるのかと思うほど賑わっていた。

修学旅行で東京に来た時は、目に入るものすべてが刺激的で楽しかったのに、実際に生活するとぜんぜん違う。

理想と現実はかけ離れているんだよね、いつどんな時も。

ぼんやりと人混みを見ていると、グレーのパンツスーツにボブヘアの細身な美女が、こちらに手を振りながら近づいてくる。

あんな綺麗な知り合いはいない、と目をそらす。しかし、彼女は目の前にやってくると、勢いよく私にハグをした。

「鈴奈、久しぶり！ 全然変わってないね」

満面の笑みを向ける彼女のことを、食い入るように見つめる。

「えっ、涼子？」

「そうだよー！」

「全然わからなかった！ すっかり都会の色に染まっちゃって。めちゃくちゃ美人になったね」

「うふふ、ありがとう」

学生時代は、炭水化物が大好きなぼっちゃり女子だった涼子。

そんな彼女は、無駄な贅肉が落ちて、化粧も上手になって、仕事のできそうなキャリアウーマンになっていた。

東京の空気に触れ続けていると、こんなふうに変貌するのか。

「とりあえずご飯食べよう。まだ仕事決まってるんでしょ？ ご馳走するから」

「ありがとう、涼子様」

手を合せて拝むようなポーズを取ると、涼子は「あはは」と笑いながら背中をバシバシと叩く。

「そんな、涼子様だなんてやめてよ。さっき電話で予約しておいたから行くよ」

「ごちゃごちゃした人混みを迷わず進む涼子に、尊敬の眼差しを向ける。素敵な女性に変身した涼子はどんなところに連れて行ってくれるのだろう。」

「涼子って今どこで働いてるの？」

「三道商事だよ」

「『三道商事』といえば誰もが知っている大手商社だよね！ すごい」

「営業部なんだけど、周りは男ばかり。負けないで食らいついて頑張ってるよ」

話しながら歩き、駅からすぐ近くにあるビルの地下へと繋がる階段を下りていく。

涼子が連れてきてくれたのは、ムーディーな雰囲気の内装居酒屋だった。店の中心部には生花が飾られていて、さりげなくジャズが流れている。

普段の私なら絶対に気軽に来ない、高級そうな店である。

半個室に案内された私と涼子は、温かいおしぼりを受け取ってビールと料理を注文する。すぐにお通しと飲み物が運ばれてきて、乾杯をした。

「大変だったね。鈴奈と正人は、絶対に結婚すると思っていたのに」

眉間にしわを寄せて険しい顔をする涼子に、私は苦笑いをして頷いた。

まさか東京でひとり暮らしをしながら、就職活動をする未来が待っているとは想像していなかった。今でも、夢なのではないかと思っている。

「十五歳から九年間も付き合っていたんだよね？」

正人はキスもエッチもすべて初めてを捧げた相手で、私は彼以外の男性を知らない。

周りからも「結婚は秒読みだね」なんて言われていて、一緒になるために二人で貯金をしていた。いつプロポーズをしてくれるのだろうと密かに期待する中、正人は上司とトラブルになり、仕事を辞めてしまった。

当時私は旅行会社で事務として働いていたので、しばらく正人を養うことにした。

愛する彼のために頑張ろう、困っている時に助け合うのが恋人だと思っていたから。

ところがある日――

面接に行つたはずの正人が家に帰ってきて、改まった様子で驚きの告白を始めたのだ。

『子供ができた』

『誰の？』

『俺の』

『はあ？ 私は妊娠してないよ？』

『お前じゃない。由里子が……』

由里子は私の親友である。

小学校の時、席が近くて仲よくなったのをきっかけに、いつも一緒に遊んでいた。

信頼しきっていたのもあり、私と正人が同棲中の家に何度も泊めていたのだ。

二人は私の目を盗んで、こっそりと愛を育んでいたという。

『別れてほしいって、お前が傷つくと思って言えなかったんだ』

私は、頭が真っ白になり黙り込んだ。

『貯金、悪いけど出産費用に当てさせてほしい』

『冗談でしょう？ あれは、二人で結婚するために貯金してたんだよ』

『お前は、生まれてくる子供を見殺しにするつもりか？』

『……見殺しって、そんな言い方するなんて卑怯すぎる』

私はそのまま家を飛び出し、友人の家でお世話になった。

冷静になればなるほど、許せないという感情と悲しみが押し寄せて……

あんな男忘れてやると、必死で働いていた。けれど、札幌にいと正人と出かけた場所が沢山あって、幸せだった頃の記憶が蘇り、苦しくておかしくなってしまいそうだった。

耐えきれなくなり、大好きだった仕事を辞めて、へそくり貯金で上京することに決めた。

完全に勢いで東京にやってきた私は、ひとまず家賃が安いワンルームアパートで生活を始めた。

ポロポロのアパートだが、無職なので我がままは言っていられない。

次は就職だと思気込んで面接を受けるも不採用ばかり。

途方に暮れていた時、東京で働いている友人の坂上涼子を思い出した。

電話をかけて事情を話すと会ってくれることになり、今日に至っている。

「正人も由里子も人間として、やっちゃいけないことをしたよね。人伝に聞いたら、正人、仕事を転々としているみたいよ」

「……そうなんだ」

つい心配になるが、正人は過去の人。

他の女性の夫なのだから関わるべきではない。

私は、嫌な気持ち流すようにビールを飲み込んだ。

「そうそう。鈴奈は就職活動どう？」

「それが決まらないの。貯金もなくなってきたし、不安しかないよ。旅行会社は諦めようかと思ってる」

「じゃあさ、私の働く会社で契約社員を募集しているんだけど、受けてみたら？」

「涼子の会社って大手商社だね。私なんか受かるわけないよ」

「そんなことないって。仕事内容は事務だから、職種はピツタリじゃない？」

涼子が印刷した募集要項を手渡してくれる。受け取って確認すると、社会保障はもちろん、ボーナスや休暇や産休、育休もついていて、福利厚生はしっかりしている。

契約社員だがさすが大手企業だ。給与も申し分ないが、こういった会社には優秀な大学を卒業した人ばかり働いているイメージがある。

「有名大学卒業じゃないからなあ」

「大学を卒業していたら応募資格があるの。ただ、三次審査まであるから簡単ではないかもしれないけど、受けてみなければ合否がどうなるかわからないよ」

涼子はそう言って、私を勇気づけてくれる。

私は募集要項をもう一度眺め、涼子に向き直った。

もうのん気を選んでいる場合ではないのだ。それに、こんな条件のいい仕事、このチャンスを選したら永遠に出会えないかもしれない。

「ありがとう。せっかくだからエントリーしてみる」

「うん！ 合格するといいね。もし一緒に働けることになったらランチしよう」
「奇跡が起きるように祈ってね」

涼子に感謝をしながら、もらった募集要項をバッグに入れる。

それから他愛のない話をしていると、ピクルスをつまむ私に涼子が尋ねた。

「今住んでいるところは、大丈夫なの？」

「めちゃくちゃボロボロのアパートでさあ。築六十年。安いからいいんだけど……」

「だけど？」

「喘ぎ声が聞こえてくるんだよね」

私の言葉に涼子が微妙な表情を浮かべる。

「喘ぎ声？」

私は思いつき顔をしかめて頷く。

壁が薄いせいとか、営みの声が大きいせいかはわからないが、丸聞こえなのだ。

入居する時にわかっていたら、いくら激安でも避けたのに……

「どんな人なのか会ったことがないからわからないんだけど、毎回相手が違うようなの」

「え！ そんなことまでわかるの？」

涼子が噴き出しそうになっている。

「喘ぎ声の質が違うの。甲高い声。ハスキーな声。掠れ声。叫ぶタイプとか、控えめに甘い声を出す人とか……」

「聴き分けられるようになって、なんの役にも立たないじゃん」

「無駄なスキルが身についちゃった。年齢層もばらけてる気がするんだ。相当格好いい人なのかな」

「そんな最低な男いくら格好よくたってお断りよ」

「確かに。就職ができたなら、まずはお金を貯めて引っ越しする」

「頑張つて。健闘を祈る！」

拳を握る私に、涼子は力強く頷いた。

久しぶりに友人に会って話を聞いてもらったおかげで、リフレッシュできた。

すっかり涼子にご馳走になってしまったので、就職が決まったらお礼をする約束をして、私はアパートに帰った。

二階建ての古いアパートの一階が私の部屋で、狭い玄関を入つてすぐにワンルームの部屋がある。

丸いちゃぶ台と座布団、畳である布団セット。

小さな冷蔵庫とカラーボックス一つに、衣装ケース三つ。必要最低限の家具しかない。

洗濯機は中古で購入してベランダに設置している。

こぢんまりとしているが、ひとり暮らしたら充分。隣の声が聞こえなければ辛抱しんぼうできるのに……
お金があったら、今すぐにでも引越したいくらいだ。

ほろ酔い気分で座布団に座り、涼子からもらった募集要項に目を通す。
バリバリのキャリアウーマンって感じで輝いていた涼子を見て、思わず過去の自分を思い返して
しまった。

札幌の旅行会社で事務として働いていた時は、残業があったりクレーム対応をしたりと大変だっ
たけれど充実していた。休日や空き時間には英語の勉強をして、キャリアアップを目指していた。
三道商事なら、きつと今までの経験や勉強してきたことが役に立つ気がする。

それに、毎日生活するだけでやっつというこの生活から抜け出さないと、日払いのアルバイトを
しなければいけない。そうになると、就職活動をする時間が減ってしまう。

「はあ」

ため息をついたら幸せが逃げていくと言うけど、つかないとやっついてられない。

今日はもう遅いし早く寝よう。布団を敷いていると……

『——あ。——つ、ああ』

うわ、また聞こえてきた。もう、いい加減にしてほしい。

たまにならいいけど、二日に一回のペースで情事が行われている。しかも、一回の時間が長い。

私は、布団を頭から被った。

あーもう、私の睡眠不足をなんとかして！

昨今では引越越しの際、挨拶に行く人はあまりいませんよと不動産屋さんが言うので、私は隣の
住人にお目にかかったことはなかった。

隣の部屋から出てくる女性を見かけたことは何度かあるが、いつも違う人だった。

おそらく家主は男性だろう。

どうして、男の人って一途になれないの？ 女性を取っ替え引っ替えするなんて、最低だ。

つついっ正人と重ねてしまい、怒りがこみ上げてくる。

結局その後、お隣さんの営みは、深夜三時頃まで続いたのだった。



涼子が働いている三道商事にエントリーし、私は奇跡的に面接を通過していった。そして、今日
はいよいよ最終面接である。

黒のスーツに身を包み、ふんわりとしたセミロングの髪の毛を後ろで一つにまとめる。上品な印
象になるよう気をつけて化粧をした。

アパートを出て駅に向かうと、ホームは人でごった返っていた。

さすが通勤の時間帯だ。

電車がやってくると、人々がなだれ込むように乗り込む。押しつぶされそうになる中、私はなる
べく端に立ちバランスを取っていた。

走り出して電車が揺れると、後ろに立っている人が体重をかけてくる。

……あれ？

ふいにお尻の辺りに違和感を覚え、意識を集中させた。

顔を動かして後ろを確認すると、すぐ後ろにスーツを着た男性がぴたりとくっついていて、手の平を押しつけて、ヒップラインをなぞっている気がするけど……これってもしかして痴漢？どこにでもいそうな中年のサラリーマン風の人ののに、こんなことするなんて。

今までの人生で痴漢に遭ったことはなかったが、もしそういう場面に遭遇したら、手を思いっきりつかんで、警察に突き出してやるうと思っていた。

私は無駄に正義感が強く、悪者は絶対に退治しなければいけないと考えている。けれど、実際に触られてみると恐ろしくて声が出せない。

……怖い。とても気持ち悪い。

背中にうつすらと汗をかき、体が小刻みに震える。

怖がっている素振りを見せたら、犯人をさらに付け上がらせるかもしれない。平気なふりをして、俯いて耐えるしかなかった。

面接会場である三道商事の最寄り駅まで、あと二駅ある。

余裕を持って出てきたけれど、次の駅で降りれば、到着がギリギリになってしまう。絶対に面接に遅刻なんてありえない。

我慢するしかない、と目を瞑った——その時だった。

「やめる」

突然頭上から低い声が聞こえてきて、顔を上げると、背が高くして立ってのいいスーツを着た男性が痴漢男の手をつかんでいた。

「なっ、なんだよ、お前！」

「一部始終を見ていました。薄汚い真似はやめたほうがいい」

顔を真っ赤にして喚く痴漢男に、男性は冷静に切り返す。

一瞬、何が起こっているのか理解できず、私はぼうっと男性を見つめた。

「お、俺は何もしていない！ 言いがかりだ！」

痴漢男はちらつと私を見て、男性にがなり立てた。

他の乗客は男性に疑いの目を向ける。

このままではいけないと思い、私は勇気を出して震える唇を開いた。

「……私、この人にお尻を触られました」

痴漢男を指差すと、軽蔑の籠もった乗客の目が一齐に彼を見た。

痴漢男はたじろいだ様子だったが、同時に電車が駅に停車し、逃げるように去っていく。

「っ！ 待ちなさい」

私を助けてくれた男性は、痴漢男を追おうと踏み出した。しかし、私はその腕をぎゅっとつかんで引きとめる。

「捕まえなくていいのですか？」

男性はそう私に尋ねたが、ここで痴漢男に時間を取られ、面接に遅れるわけにはいかない。悪を放っておくのは自分のポリシーに反することだけど、今はどうしても面接を優先させたかった。

「どうしても行かなければならない用事があるので諦めます。本当は警察に突き出したかったのですが……」

「そうですか。あなたがそう言うのなら」

「助けてくださり、ありがとうございます」

お礼を言って改めて彼を見た私は、息を呑んだ。

スーツの上からでもわかる引き締まった体躯と、すらりと長い手足。

黒い短髪はかつちりとセットされ、キリツとした切れ長の目に銀縁の眼鏡をかけている。高い鼻梁と形のいい薄い唇が、知的な印象を高めていた。

こんな性格いい人、普通に生活していたら中々お目にかかれないだろう。

とても真面目そうだし、仕事もできそうだ。しかも、爽やかないい香りがする。

彼を見上げたまま、頬がどんどん熱くなっていく。自分を見つめたまま固まる私を不思議に思っただのか、男性は小首を傾げた。

「やはり気分が優れませんか？」

「い、いえ！ 大丈夫です」

私は慌てて彼から目をそらし、俯く。

ドキドキとうるさい心臓をなんとか落ち着かせていると、会社の最寄り駅に到着した。

偶然にも男性も同じ駅で降りたので、私は長い足で人の波を縫って歩く彼を必死に追いかける。

「あ、あの、待ってくださいいっ」

呼び止めると、彼は階段の前で立ち止まり、少し驚いた様子でこちらを振り向いた。

「どうかしましたか？」

「お礼をさせていただきたいのですが、もしよければご連絡先を教えてくださいませんか？」

緊張で声が上がると、男性は私をじっと眺めると、小さく首を横に振った。

「いえ、人として当たり前のことをしただけですから」

「で、でも……」

「本当に大丈夫ですから」

彼はそう言って軽く会釈をすると、足早に去っていき、あっという間に人混みの中に消えてしまった。

第二章 コーヒーとチョココレート

「部長、データが完成しました」

「ありがとうございます。星園さんは仕事が速いから助かっていますよ」

ランチを終えた私は、総務部長に書類を渡しに向かった。五十代前半の彼はいつも穏やかで、一緒に仕事がいややしい。

『三道商事』に入社して三ヶ月。私は、本社の総務部に配属になり、主にデータ作成のアシスタントを行っている。

四十階建てのビルの三十五階から最上階までを三道商事が使用し、下のフロアには他社やクリーニング、飲食店が入っていて、一階にはコンビニがある。

周辺には美味しいレストランもあって、時間が合えば涼子とランチをしている。

こんないい環境で働けるなんてありがたい。

入社してわかったのは、『三道商事』は本当に大企業であるということ。

連結子会社も合わせると八万人近くが雇用されていて、この本社にもかなりの数の社員が働いている。

長く働いている涼子ですら、社員数が多いため知らない人がいっぱいいるらしい。

最初は、自分が東京で働いていることが信じられなかった。でも、オフィスの窓から建物がぎゅっと詰め込まれた景色を眺めると、本当に東京で働いているのだと実感する。

同棲していた彼氏に浮気されて、貯金も取られてしまいどん底だったけど、ここで頑張っている。

そう気持ちを新たに、一生懸命仕事に励んでいた。

「星園さん、三十分後に大会議室へ行ってもらえますか？」

総務部長が先ほど渡した書類から顔を上げて、私を見ていた。

「何かありましたか？」

「あ、いや。行ってくれたらわかるから、頼んだ」

大きなミスでもしてしまっただけかな……

結局、総務部長はその場では話してくれなかった。

約束の時間になり大会議室へ向かうと、中には何人かの社員がいた。

一体、何があるのだろう。

私は一番後ろの席に座り、緊張しつつ前を向いていると、総務部長が入ってきた。

「突然集まってもらって申し訳ない。実は、経営企画室のアシスタントを急遽募集することになった」

途端に、大会議室にいた女性社員が色めき立ち、瞳をキラキラと輝かせる。

経営企画室といえば、会社の主力部署と言っても過言ではないところだ。

経営陣を補佐しながら、中期経営計画の策定や、融資や投資の審議など、会社経営の舵取りを行う部署である。

「というわけで、これから適性試験を行います」

まさか、そんな部署の選考を受けることになるなんて……

試験用紙と鉛筆が配られると、総務部長がストップウォッチを手に持った。

「それではよい、始め」

試験会場に、カリカリと鉛筆の音が響く。

強引なやり方に反発する気持ちもあったけれど、手を抜くのは嫌だったので、私も集中する。

正しい展開図を選んだり、仲間はずれの言葉を探したり。

こういうのは結構得意なほうだ。花形部署での仕事なんて私には関係ないなど思いながら、問題を解いた。

「はい、終わり」

あつという間に時間が経ってしまい、問題用紙が回収される。

「結果は後日お知らせいたします。今日試験があったことは、他言しないでください」

総務部長がそう声をかけると、全員、席を立ち始めた。

私もみんなに続いて大会議室を出ると、一緒に試験を受けていた女子社員の会話が耳に入ってくる。

「経営企画室で働けるなんて、夢みたいだね」

「エリート集団と一緒に働くのはちょっと緊張しちゃうけど、玉の輿こし狙えるかも！」

「だよねえ。やばーい」

職場恋愛は否定しないけれど、エリートの中で働くなんて恐ろしいと思わないのかな。

私は、このまま総務部で働いていた……。まあ、今日一緒に試験を受けた人は、優秀な人たちばかりだろうし、万が一にも異動はないよね。

そんなことを思いながら、私は総務部に戻ったのだった。

ところがその日の夕方、私は総務部長から個室に呼び出された。

「座ってくれ」

「部長、突然試験をするなんて驚きました」

「ああ、悪かったよ。仕事が速くて優秀な社員というのが条件だったから、君を推薦すいせんしたんだ」

申し訳無さそうに微笑まれたので、それ以上何も言えずに黙り込む。

総務部長は小さく咳払いをすると、おもむろに話し始めた。

「今日は試験を受けてくれてありがとう。採点したんだが、一番成績がよかったのが星園さんだったんだ」

まさか自分が一番だなんて信じられず、フリーズしてしまう。

「急で悪いのだが、来週から経営企画室で働いてほしい」

「そんな、困ります。私は総務部で頑張っていきたいと思っていますので」

「すまないが、そこをなんとか……」

困惑する私を、総務部長は必死きじに論ずる。

「プロジェクトがある時は忙しいが、星園さんだったらアシスタントとして期待に応えられるだろう」

会社にとって重要な部署のアシスタントなんて、私にできるのかな。

とんでもない失敗をして、仕事を失ったら……とついつい考えてしまう。

そう考えたところで、私は小さく頭を振った。

「……いや、何もしないで諦めるのは自分らしくない。せっかく能力を認めてもらったのだから、ここは挑戦するべきだ。」

私は、心配そうに顔を覗き込んでくる総務部長を真っ直ぐに見つめた。

「承知いたしました」

「ありがとう！ 本当は手放したくなかったんだが、会社のために頑張ってくれ」
これからどんなことが待っているかわからない。

それでも自分にできる限り一生懸命やろうと、私は心に誓ったのだった。

試験を受けた次の日、私は涼子と社員食堂でランチをしていた。

弁当を持参している社員や定食を注文している人など、みなさん、思い思いに休憩中だ。

本日のランチセットは、エビピラフとコーンクリームコロッケ、コンソメスープにミニサラダ。

このメニューはどれもチョイスしても美味しい。涼子も同じものを注文して向かい合って座る。
「おめでどう。さすが鈴奈ね」

「な、なにが？」

「経営企画室にアシスタントとして採用されたことに決まってるでしょう。誰もが行きたい部署なのよ」

私は眉間にしわを寄せて頭を左右に振る。

今朝、組織内の情報をやりとりできる社内イントラで私の人事異動が発表され、色んな人におめでどうと言われた。

「エリート集団なのよ。玉の輿こしに乗りたくない女性社員が行きたい部署、ナンバーワン」

「玉の輿こし？ それどころか私はもう恋愛なんかしたくないし」

正人のせいで恋とか愛とかは、こりごり。男性を信じて傷つくのは絶対に嫌だ。

「今は恋愛する気持ちはないかもしれないけど、人なんてどこでどう変わるかわからないんだから、恋をしないって決めちゃうのはもったいないって」

涼子は楽しそうに言う。一方私は、エリート集団の中でやっていけるのかと思って、気持ちがい沈んでいく。

「まあ、そんな暗い顔しないで。ただ、加藤かとう室長はかなりクールらしいよ。優秀すぎて、一般人とは話が合わないって噂されているの。それでも容姿がいいし、地位もあるってことで狙っている人は結構いるみたい」

「そうなんだ。クールな上司の逆鱗ぎやくりんに触れないようにしなきゃ」

「それと、プロジェクトがある時は残業が多いらしい」
体力には自信があるので残業は問題ない。けれど、私が役に立てるのかと考えるだけで胃の辺りが痛くなってきて、食欲が失せてしまう。

「せっかく入社できたのに、クビになったらどうしよう……」

「鈴奈なら絶対にやっていけるって。あんたほどの努力家にはいないもん。だってさ、学生時

代もすぐ頑張っていたでしょ。大学の時は、お母さんに迷惑かけたくないからってバイトもいっぱい入れてさ」

私の両親は幼い頃に離婚し、母親が女手一つで育ててくれた。学費の面で迷惑をかけたくなかったから、奨学金を借りて進学し、アルバイトをして生活費を家に入れる生活をしていた。

もちろん勉強を疎かにはせず、それなりに優秀な成績を収めたのだ。

四年制大学を卒業して、旅行会社に就職が決まった時は本当に嬉しかった。初めての給与で母にお財布をプレゼントしたことが懐かしい。

「辛いことがあれば言って？ いつでも飲みに付き合うから」

「ありがとう」

私は満面の笑みを涼子に向けると、ピラフを頬張った。

部署異動が発表されてからの一週間は、ちゃんと務まるのだろうかと考えて、あまりよく眠れなかった。

月曜日になり、いつものように総務部へ出社した。新しい部署へは、総務部長が案内してくれる約束になっている。

短い期間だったけれどお世話になったメンバーに挨拶を終えると、私は総務部長と共に廊下へ出た。総務部長は、緊張する私に穏やかに語りかけてくれる。

「加藤室長は、外資系コンサルタントとしてキャリアを積んだ後我が社に入社して、三十二歳で室長になったとても優秀な方なんだ。もう室長になって二年か。早いなあ」

「そうなんです。なんだか私とは生きる世界が違う気がします」

弱冠三十二歳で室長に抜擢されたなんて、自分とは脳みその構造が全く違うのだろう。

「大変なことが多いかもしれないが、色々と学べるところだから、一生懸命頑張っておいで」

「はい。力になれるよう精一杯やらせていただきます」

「君なら大丈夫だ。さあ、ここだ」

経営企画室は最上階にあり、社長室のすぐ隣の部屋だった。

室内は、パーティションで三つに区切られている。

「それぞれのチームが四名から五名ほどで構成されているんだ。さらに奥に経営企画室をまとめる経営管理チームがあって、そこで星園さんは室長のアシスタントをしてもらうよ」

まさか、室長の下で働くとは思わなかった。

総務部長が出社している社員に会釈しながら進むと、部屋の奥にある扉の前で立ち止まった。

「経営管理チームは特に機密事項が多いから個室なんだ」

「なるほど」

「この中には、室長室も別にある」

総務部長がノックをすると扉が開かれて、背の高い男性が出てきた。

「加藤室長、おはようございます。本日からこちらで働く星園鈴奈さんです」

総務部長が私のことを紹介すると、クールな瞳がこちらに向けられる。

「お待ちしております。室長の加藤です。アシスタントが不在で大変だったのですが、星園さんが来てくれるというのでとても助かります」

「星園と申します。至らないこともたくさんあると思いますが、力になれるよう努力していきますので、よろしくお願いします」

勢いよく礼をして、加藤室長を見上げる。加藤室長は冷静な表情を崩さず、ゆつくりと頷いた。噂通り、厳しそう。

短髪で清潔感があつて、銀縁の眼鏡に切れ長の目の超絶イケメン。

……どこかで会つたことがある気がするけど、思い出せない。

思わずじつと加藤室長の顔を見つめてしまうと、彼は不思議そうな表情を浮かべた。

「何か？」

「い、いえ」

「では中にお入りください」

促されて室内に足を踏み入れると、机が五つ向かい合つて設置されていた。

「室長席と、他のメンバーの席がこちらにあります。奥の扉は室長室で、私はどちらの机でも仕事をします。星園さんの席はここですから、座っててください」

「わかりました」

腰をかけると、加藤室長がパソコンの電源を入れた。

見届けてくれた総務部長が、私の肩を軽く叩いて激励してくれる。そして、加藤室長に挨拶をすると、自分の部署へと戻って行った。

総務部長を見送つた後、加藤室長がパソコンのログインIDを教えてください。

ふと、鼻をくすぐつた香りで私は記憶が一気に蘇った。

——加藤室長は、電車の中で痴漢から助けてくれた男性だ！

こんなところで一緒に働けるなんて、すごい偶然。加藤室長は、私のことを覚えているかな。

「メンバーが集まつてから紹介しますので一言、挨拶をお願いします」

「はい、わかりました。……あの」

「あの時は助けてくださり、ありがとうございます」とお礼を言おうとしたが、加藤室長がクールな視線でこちらを見る。気軽に話しかけられないオーラを感じて、口をつぐんでしまう。

「何か？」

「いえ」

とてもじゃないけれど、プライベートのことを話せる雰囲気ではない。いつか、機会があれば話題を振ってみよう。

静かな室内で緊張しながら座っていると、次々と経営管理チームのメンバーが出勤してきた。

みなさん、スーツを格好よく着こなしていて、仕事ができそうな空気を纏っている。

全員が揃うと、加藤室長が私に一人ずつ紹介してくれた。

「彼は瀬川蓮司マネージャー。前職は公認会計士でしたが、その経験を活かしてここで働いてくれ

ています」

「わからないことがあれば、気軽に聞いてください」

瀬川さんと紹介された男性は、がっちりとした黒髪で、体のラインが細い好青年といった感じ。物腰が柔らかくて話しやすそうだ。

「彼女は、安藤美位子マネージャー。外資系コンサル企業から我が社に転職してきました」
「よろしく」

唯一の女性である安藤さんは、硬い表情でそう一言挨拶した。美人だけど少し取っ付きにくいイメージだ。

「彼は、板尾聖夜リーダー。営業から経営企画室にやってきた優秀な社員です」

「若い子が入ってくれて嬉しいです。俺もまだまだ勉強中だけどよろしくね」

板尾さんは茶色の髪にゆるくパーマがかかっている、甘いマスクをしている。年齢も近そう、この中では一番話しかけやすいかもしれない。

「では、星園さん、一言お願いできますか？」

加藤室長の言葉と同時に、全員の視線が私に注がれる。

「星園と申します。みなさんの力になれるように頑張っていきたいと思しますので、よろしくお願
いします」

挨拶を終えると早速仕事が始まり、加藤室長から分厚い紙の束を渡される。

「情報収集してきた資料なんです、明日の午後までに纏めてください」

相当な量なので驚いてしまう。これを明日の午後までになんて、間に合うのだろうか。

予想以上にやるが多そうで、もたもたしてられない。

「書式はどうかさいますか？」

「書式はこちらのものに揃えてもらえると助かります。過去の資料は共有ファイルに格納されていますので、参考にしてください。わからないことがあれば、いつでも私に聞いてくださいね」

加藤室長は、てきぱきとわかりやすく説明してくれる。

自分の席に戻る加藤室長に視線を送り、涼子の言葉を思い出した。

——加藤室長はかなりクールらしいよ。優秀すぎて、一般人とは話が合わないって噂されているの。

確かにクールで近寄りたがたい雰囲気だけど、意地悪な人ではなさそう。

とりあえず、経営企画室での初仕事、ミスがないように頑張らなくちゃ！

私が集中して資料を作成していると、ふいに板尾リーダーが室長を呼んだ。

「室長」

板尾リーダーが真剣な面持ちで室長のところに向かう。

「昨年買収した道産乳業ですが、思ったよりも業績が伸びておりません」

室長が鋭い視線で受け取った資料を眺める。

「他社とタイアップしたり、SNSをさらに活用したりするべきだという意見が出ております。それらと連動して新商品を売っていきたくないと考えております」

「意見としてはありだと思えますが、宣伝に力を入れるとなると規模によつては相当の費用がかかりますよね。イニシャルコストはどれくらいを考えていますか？」

「はい、それについての資料はこちらです」

加藤室長は、厳しい表情で新たに手渡された資料をチェックしている。仕事に対してかなり厳しそうだ。

「なるほど。このコストが引つかかります。もう少しブラッシュアップしてみてください」

「わかりました。ありがとうございます」

なんだか難しそうな話をしている全くだらない。

これからもこういった会話を聞くことになりそうだ。

やっていけるか不安になるけれど、昔から根性だけは誰にも負けないつもり。とにかく必死に食らいついていこう。

私はひとり心の中で、改めて決心するのだった。



慣れない環境だったものの、なんとかアシスタントとして働き始めて二週間が過ぎた。

経営企画室の仕事は思ったよりもずっとハードで、毎日残業続き。家に帰ったら倒れ込むように眠ってしまう。

今日も朝から膨大な量のデータ入力をしている。

総務部と違うところは、仕事の量とスピードが求められるのと、社員のスケジュールを把握しながら業務を進めなくてはならないことだ。

加藤室長は分単位で動いているため、質問がある時には要点を纏めてから発言するようにしている。

本当に彼は朝から晩まで大忙しだ。室長の席にいてもあるが、ほとんどは室長室で打ち合わせをしているか、会議でいないことが多い。

最初の数日間は、近くにいたら緊張してしまうから、不在のほうがありがたいなんて思っていたけれど、二週間ともに仕事をして、加藤室長つて噂よりも優しい人なんだな、と感じる。

仕事が速くて助かっています——なんて、さりげなく褒めてくれたし。

なんというか、『真面目』が加藤室長に一番合っている言葉だ。しっかりしていて、頼りがいがある。どんな仕事にも真摯に向き合っている、誠実な人。

元彼の正人にも、加藤室長の爪の垢を煎じて吞ませてやりたい。

仕事が一段落すると、ランチタイムになっていた。

ランチに行つてこようと椅子から立つと、席にいた加藤室長が革の手帳を開いている姿が目に入った。

「……今日は営業部長とランチか」

独り言のように呟いた加藤室長は、すっと立ち上がった。

加藤室長は、ランチの予定までスケジューリングしているの？

驚いた私は、思わず彼に話しかけてしまう。

「加藤室長は、昼食を誰と食べるかということまで決めているのですか？」

私の声に戻り返った加藤室長が、少し目を細めて説明してくれる。

「この仕事は、様々な部署と意見を交換するのがとても重要なんです。地道に築いた人間関係があると、経営企画の仕事は円滑に進むのですよ」

「すごいですね。そういうところまで心を砕いてお仕事されているなんて」

尊敬の眼差しを向けると、加藤室長は口元に柔らかな笑みを浮かべた。

……あ、微笑んだ。

経営管理チームに配属になってから厳しい表情しか見たことがなかったので、無意識に目が奪われる。

「さあ、ランチタイムに入っていますよ。いつてらっしゃい」

「は、はい。行ってきます」

加藤室長の新たな一面を見ることができてすごく嬉しい。

私は自然と頬が緩むのを感じながら、休憩に入った。

昼食は涼子と待ち合わせをしていて、会社の近くにある人気の Pasta 屋さんに決めた。節約のためにお弁当を持参することが多いけれど、たまにはお洒落なところでランチを楽しみたい。

注文したカルボナーラセットが運ばれてきた。

「わあ、美味しそう。いただきます」

スプーンとフォークを使ってくるくと丸め口に運ぶ。

とても濃厚で美味しい。さすが、人気店だけある。

「どう？ 恋愛モードになってきた？」

Pasta に舌鼓を打つ私に涼子が興味津々といった様子で話を振ってきたので、私は左右に首を動かす。

「まさか。仕事が大変でそれどころじゃないよ」

「経営企画室にはエリートばかりいるじゃない。しかも、みんな仕事が忙しいから恋人がいないって噂だよ」

「加藤室長も？」

涼子の話に思わず反応してしまう。

「経営企画室、室長よ。しかもあのルックスだから狙っている女性が多いわね。でも、恋人がいるって噂は耳にしたことがないわ」

「三十四歳だし、結婚適齢期だと思うけど……仕事で恋人なんて作る暇がないのかも」

「確かに。彼女の理解がないと付き合うのが厳しいくらい働いているよね」

「あんなに容姿がよくて、真面目で、仕事ができ、お金持ちで。もったいない。恋人がいないじゃ、加藤室長はどうやってストレス発散しているのかな」

うーんと考える私に、涼子が人の悪い笑みを向ける。

「誰にも言えない秘密があるかも」

「なにそれ」

涼子の言葉にプツと小さく噴き出すと、二人でクスクスと笑い合う。

加藤室長、変な想像をしまつてごめんなさい。

職場で一緒に働いている人のプライベートなんて、わからないものだ。もしかしたら、涼子の言うように、人には言えない秘密があるかもしれないし。

「明日の夜、歓迎会をしてくれるんだって。そこで何か面白い話が聞けるかも」

「へえ、そうなんだ。楽しみにしているから」

涼子の瞳が、きらりと妖しく光った。

今日も残業になつてしまい、気がつけば二十二時を回っていた。

お昼にカルボナーラをお腹いっぱい食べたとはいえ、こんなに夜遅くなればお腹が空く。今日はコンビニに寄るかなと考えながら、パソコンの電源を落とした。

席にいる加藤室長をちらりと見ると、彼はまだまだ退社する様子がない。一体、いつ家に戻っているのだろう。

「お先に失礼します」

声をかけると、加藤室長は顔を上げてクールな視線をこちらに向けた。

「お疲れ様でした。気をつけて帰ってください」

冷たさを感じる表情とは裏腹な、気遣ってくれる彼の言葉に、私の胸がほわっと温かくなる。

明日の歓迎会、楽しみ。



「星園さん、これからもアシスタント、よろしくお願いします！ 乾杯」

瀬川マネージャーの乾杯の音頭で歓迎会が始まった。

歓迎会として、加藤室長が会社の近くにあるタイ料理屋を予約してくれていた。

木目のテーブルにオレンジの椅子が設置されていて、壁には独創的なイラストが飾られている雰囲気の良い店だ。スパイスの香りが店中に漂っていて、食欲をそそられる。

私の隣に板尾リーダーが、目の前に加藤室長が座った。加藤室長の隣は安藤マネージャー、その横に瀬川マネージャーが腰かけている。

ふと、加藤室長を見るとウーロン茶を飲んでた。

「加藤室長、お酒が苦手なんですか？」

「……今日は車なんです」

濁したように言う加藤室長を不思議に思っていると、板尾リーダーが耳打ちで教えてくれる。

「室長、実はとてもアルコールに弱いんだよ。めっちゃ飲めそうな顔してるのに」

「そうなんですネ」

加藤室長の意外な一面を知って、頬が緩んだ。

本当はお酒が弱いのに、あえて車で来ているからと隠すなんて。九歳も歳上なのについ可愛いと思ってしまった。

「星園さんは北海道出身なんですよね？」

「はい」

板尾リーダーに話しかけられ、私は笑顔で返事をする。

「だから色白で可愛いんですかね？」

「ま、まさか」

可愛いなんて言われると思っていなかったので焦ると、安藤マネージャーが大きいため息をつく。

「板尾リーダー。そういう発言はセクハラと受け止められる可能性があるのです、慎んでください」

「えー、厳しいですねえ」

安藤マネージャーの指摘に、板尾リーダーは口を尖らせた。なんとなく険悪な雰囲気になる。

「あの、私は何を言われても結構平気なので……なんでも言ってください」

なんか申し訳ないなと思つて発言すると、安藤マネージャーが厳しい表情を浮かべる。

こういう場合、どう答えればいいだろう……

困っていたところで、加藤室長がさつと話を変えてくれた。

「北海道は前に何度かお邪魔したことがあります、仕事ばかりなので今度はプライベートで行つ

てみたいです」

「俺も食い倒れツアーに行つてみたいですネ。北海道つて美味しいものがいっぱいあるから」

瀬川マネージャーが、空気を読んで話に乗つかる。

「もし旅行される予定があれば言ってください。一応旅行会社で働いていたので、何かお役に立てるかもしれません」

明るい口調で伝えると、加藤室長がゆっくりと頷く。

「そうですか。ではもし北海道を旅行することがあれば、ご相談させていただきます」

加藤室長は、仕事の時よりもいくぶん柔らかい口調でそう言った。

二時間の歓迎会を終えて自宅に帰宅した私は、洗面台の前に立ち、メイクを落とした。今日は、みなさんと色んな話ができて楽しかったなあ。戸惑うこともあつたけど、加藤室長が助けてくれたし……室長は仕事ができるだけじゃなくて、部下を気遣つてくれる人なんだ。

改めて加藤室長のすごさを感じていた、その時。

『——あつ、あつん。あつ……』

今日もお隣さんから声が聞こえてきた。女性の声は、数日前に隣から聞こえてきたものとは違う。色んな女性の声が聞こえてくるたびに、私は浮気をされた経験を思い出し、色々と考えてしまう。遊ばれた人がどんなに傷ついて悲しむのか、女性を取っ替え引っ替えするような男性にはわからないのだ。

そこまで考えると、余計に苛々する。他人の事情だから気にしちやいけないんだろうけど、なん

せ壁が薄い。

次の日の朝、出勤するために部屋から出ると、ちょうど隣の部屋からも女の人が出てきた。一度見かけたことがある、細くて眼鏡をかけている可愛らしい子だった。

「お、おはようございます」

私と目が合うと、女の子は恥ずかしそうに挨拶をしてくれた。

あんなピュアっぽい子が、遊ばれて悲しむ姿を想像すると切なくなってくる。

ピュア子ちゃん、頑張れ、と私は勝手に彼女にあだ名をつけてエールを送った。

歓迎会を開いてもらってから、職場のメンバーと距離が近づいたように思える。あれから一週間が過ぎ、相変わらず私は忙しい毎日を送っていた。

職場に到着すると、最初に確認するのはみなさんのスケジュール。

今日は、板尾リーダーも安藤マネージャーも瀬川マネージャーも外勤でない。

加藤室長は会議があるらしく、出たり入ったりする予定になっている。一人で電話番をするのは自信がなく、緊張しながら過ごしていたら、あつという間に昼休憩になった。

節約のために作ってきたお弁当をロッカーから取り出して、デスクの上で広げると経営会議から加藤室長が戻ってきた。

「星園さん、お疲れ様です。お留守番ありがとうございました。何もありませんでしたか？」

「はい。特に何もありませんでした」

私が答えると、加藤室長は頷いて、目を細めて微笑んでくれる。

「今日はお弁当なんですわね」

加藤室長はそう言って、私のお弁当を覗き込んだ。

「美味しそうですね。手作りですか？」

「はい。簡単な物しか入っていませんけど」

「実は自分も弁当なんです」

「そうなんですわね！ では、一緒に食べませんか？」

予想外の誘いだっただのか、加藤室長は驚いた表情をしている。

急に不躰だっただけかな、と慌てると、彼は優しい瞳になって言った。

「ゆっくり話す機会もなかったですわね。しかし、こんなおじさん上司と一緒に食べるなんて、嫌じゃありませんか？」

「加藤室長は、おじさんなんかじゃありません」

私はやや強い口調で否定した。すると、加藤室長は自分のロッカーからお弁当袋を取り出し、私の隣に座る。

「ではお言葉に甘えて、ご一緒させていただきます」

どんなお弁当なのだろう。気になって、つい彼のお弁当を見つめてしまう。

シルバーのお弁当箱の蓋を開けると、色鮮やかな野菜が入っていた。

冷凍食品を詰めただけではないということがすぐわかった。これは間違いない手作り弁当だ。

……誰に作ってもらったんだろう。彼女がないという噂だけど、本当はいるのかもしれない。私があまりにも凝視しすぎたので、加藤室長が不思議そうに首を傾げる。

「何か？」

「いえっ、美味しそうなお弁当ですね」

「ありがとうございます」

加藤室長は嬉しげに頬を緩めた。

彼女の手作り弁当を褒められて、いい気分なのかもしれない。

「星園さんは、料理は好きですか？」

「嫌いではありませんが、私の場合、節約するために作っているのです」

「そうですか。でも、色のバランスもいいですし、美味しそうですよ」

「そう言っていただけだと嬉しいです」

加藤室長とは、意外にも会話が続いた。

とても仕事ができる人なので、話が合わないかもと勝手に決めつけていたが、案外、波長が合う気がする。

加藤室長が大人だから、話を合わせてくれたのかもしれないけれど……

「午後からも不在にしていますが、留守をよろしくお願いします」

「わかりました。お任せください」

食事を終えると、加藤室長はまた出かけてしまった。

経営管理チームには、私ひとりぼっちだ。静かな空間の中パソコンに向かっていて。集中していると、気がつけば時間が経過しもう夕方だ。

加藤室長は会議で遅くなるため、定時になったら上がっていいと言われていた。今日やらなければいけない仕事はほとんど終わっているから、このまま定時で退社しよう。

しかし、あともう少しで帰れるという時に電話が鳴った。

「経営管理チーム、星園です」

「Hello……」

突然、電話の相手が英語でペラペラと話し始めたので、固まってしまう。

何を言っているのかはなんとなくわかるが、どう答えたらいいか咄嗟に出てこない。

「ソーリー、あ……えっと」

私がちゃんと対応できないせいで、通話相手がどんどんヒートアップしていく。

「ソーリー……、プリーズ……。コールバックオッケー？」

自分のわかる単語を並べて話すが、相手はかなり急いでいる様子で、イライラしているのが伝わってくる。専門用語らしき英語を並べられて、動揺して心臓の鼓動が速くなる。

……ど、どうしよう。

その時、タイミンクよく加藤室長が戻ってきた。助けを求めて視線を向けると、彼は異変に気がついて、すぐに電話を代わってくれた。

流暢な英語で対応する姿に、安堵を覚え体の力が抜けていく。

電話を終えると、加藤室長が安心させるように頷いた。そんな彼に、私は素早く頭を下げる。「申し訳ありません。ちゃんと私が対応することができなかったたので、怒らせてしまいました」「いえ、一人にさせて申し訳なかったです。それに相手が怒っていたのは、あなたのせいではありません」

加藤室長はいつもと変わらずクールだ。

「本日届いていなければいけない大事な資料を、送信していなかったらしい。それで激怒していたようです。申し訳ないですが、残業して資料作りを手伝ってもらえませんか？」

「は、はい！」

こんな私でも役に立てるのなら、残業なんてお安い御用だ。加藤室長が私の席の隣に立ち、指示をする。

「共有フォルダーを開いてください」

「はい」

「この資料のA列とC列に数字を打ち込んでほしい。五千列ほどあります。これを入れ終えたら、表を作ります」

「わかりました」

「お客様はとにかく急いでいるので、二人で力を合わせてなるべく早く送信しましょう」

「はい」

「自分はもう一つのファイルから始めます」

加藤室長はテキパキと作業に取りかかる。

私も、眠気も時間も忘れて一心不乱に打ち込んでいく。

メイクが落ちてボロボロの顔になっているだろうけれど、そんなこと気にしていられなかった。

「終わりました。ダブルチェック、お願いします」

「では、星園さんはこちらのファイルの確認を頼みます」

やっと提出できる状態になった時、空はもう明るくなっていた。

会社に泊まって残業したのは初体験だ。

加藤室長が資料をチェックしてくれる横で、達成感と安堵でうとうととしてしまう。

……ああ、もう限界。

まぶたが下りて、頭がカクンと落ちる。

はっと気がついた時、加藤室長がコーヒーを差し出してくれた。

「すみません、眠ってしまいました」

「朝まで付き合わせてしまって、申し訳なかったです」

ブラックコーヒーの湯気が上がっていて、いい匂いがする。

砂糖が二本置かれたので、弾かれたように顔を上げた。

「君は甘いのが好きそうだから」

「当たり前です。大好物はチョコレートです。いただきます」

砂糖をたっぷり入れた甘いコーヒーを飲んで、ほっとした気持ちになる。

「相手とも連絡が取れて、怒りが収まっていたようです。星園さんがいてくれて本当に助かりました」

彼は、席に戻ると椅子に少し深く座った。

銀縁の眼鏡を外して、眉間にしわを寄せている。目が疲れているのかもしれない。それはさておき……加藤室長は眼鏡を外してもイケメンだ。

朝起きて、こんな美しい顔が間近にあつたら朝からとろけてしまいそう。

「一度家に帰って仮眠を取ってきてもいいですよ」

「お風呂に入らないと、ちょっと臭いですかね」

「え？」

思いもよらぬ反応だったのか、加藤室長がクスツと笑った。

「面白いことを言いますね」

「……そうですか？」

きょとんとして見ると、加藤室長は頬を少し緩めたまま、スマホを取り出した。

「近くに入浴施設があるかもしれないので、調べてみます」

長い時間二人きりで仕事をしていたためか、なんとなく距離が縮まったような気がする。

真面目で、優しく、冷静で……もし加藤室長みたいな人が彼氏だったら、穏やかな時間が過こせそう。

ついそんなことを考えていると、私の視線に気がついた加藤室長が首を傾げる。

「何か？」

「い、いえ」

何考えてるの、私！ 加藤室長には、手作り弁当を作ってくれる彼女さんがいるじゃない。

どんな人とお付き合いしているのだろうと想像し、ちくんと胸が痛む。

私は加藤室長に近づいて、いつも携帯しているチョコレート一つ、彼のデスクの上に置いた。すると彼は、不思議そうに私を見つめた。

「加藤室長も疲れていると思うので、休憩してくださいね。ではちょっと外出してきます」

加藤室長が、ふわりと優しい笑みを浮かべ頷く。

「ああ、ありがとう」

部署から出て廊下へ出ると、心臓がトクトクと鼓動を打っていた。

いつも厳しい顔をしている人がたまに見せる笑顔って、破壊力がある。加藤室長の彼女は、彼のそんなギャップに惚れたのだろうか。

また痛みだす胸に気づかない振りをして、私はスマホでシャワーを浴びられるところを探す。近くにシャワー室のあるネットカフェがあり、急いで向かった。

始業時間に間に合うように会社に戻ると、加藤室長が板尾リーダーに昨日あったことを報告している。どうやら板尾リーダーの担当しているお客様だったらしい。

自分の席に座った板尾リーダーが、申し訳なさそうに両手を合わせてきた。

「鈴奈ちゃん、残業してくれたんだってね。迷惑をかけちゃって本当にごめん」

突然下の名前で呼ばれたのは驚いたが、そこはどうでもいい。

いつも元気な板尾リーダーが困った顔をしている。

「いえ、お役に立ててよかったです。元氣出してください」

私はチョコレートの一つ、板尾リーダーのデスクの上に置く。ミスは誰にでもあることだし、あまり気を遣ってほしくなかった。

「ありがとう。鈴奈ちゃんっていい子だなあ」

感激といった様子の彼に苦笑いをして、私はパソコンに向かった。

仕事をしながら、昨夜のことを思い出す。

私の英語能力がもつと高ければ、電話の相手を早く落ち着かせることができたかもしれない。最近忙しい日々を送っていて、英語の勉強から遠ざかっていた。これを機にもう一度、本腰を入れて勉強するべきかもしれない。

早速週末にテキストを買い、休憩時間や仕事帰りを使って少しずつだが勉強を始めた。

今日のお昼休憩は自分のデスクで過ごし、テキストを開いていた。そこへ板尾リーダーが戻ってきて、私に話しかけた。

「お疲れ様」

「お疲れ様です」

ホワイトボードに書かれていた休憩という文字を消すと、板尾リーダーがテキストを覗き込んで

くる。

「英語の勉強をしているの？ 鈴奈ちゃんは偉いね」

「この前のことがあったので、しっかり学び直そうと思ひまして」

「偉い」

板尾リーダーが柔和な笑みを浮かべて、私の頭をポンポンと撫でる。その時、加藤室長が入ってきた。

「加藤室長お疲れ様です。鈴奈ちゃん、英語の勉強してるんですよ」

「そうですか。頑張っていますね」

加藤室長と目が合い、咄嗟に目をそらしてしまう。

頭を撫でられたところを見られてしまった。なんだか、気まずい……

しかし、加藤室長は大して気にしていない様子で、さっさと室長室に入っていく。そんな彼の姿に、私は何故か落ち込んでしまうのだった。

その日、仕事を終えたのは夜二十一時。

経営企画室はほとんどの社員が帰っていて、フロアが暗くなっている。だが、室長室の明かりは煌々と輝いていた。

経営管理チームでは、私が最後だ。

帰る準備をしてから室長室のドアをノックし、応答の後、扉をそっと開く。中には、眉間にしわを寄せて難しい表情をしている加藤室長がいた。

加藤室長は、元々鋭い瞳をしているので、余計に怖い顔に見えてしまう。

「お疲れ様です。そろそろ退社しようと思いますが、他にやることはありませんか？」

「ありがとうございます。本日やっていたくことはもうありませんので、気をつけて帰ってください」

「はい。失礼します」

私は扉を閉めると廊下に出たが、数歩進んで立ち止まる。

加藤室長って、いつも一番早く来て一番遅くに帰っている。

いつ休んでいるのだろうか。ちゃんと休息をして、癒しの時間はあるのだろうか？

無性に心配になってしまい、再び室長室へ向かう。もう一度ドアを叩いて、中に入った。

「どうかしましたか？」

不思議そうな加藤室長に近づき、鞆かまからチョコレートを取り出す。

「難しそうな表情をなさっていたので、気になってしまっ……。私には想像ができないほど大変な仕事をされていると思いますが、少しでもいいので休憩してください」

言い終えた後、私は顔がだんだん熱くなるのを感じた。

私ったら、上司に対してなんてことを言っているのだろう。失礼すぎる！

加藤室長はしばらく無言で私を見つめると、小さく笑った。

「星園さんは優しいんですね」

「あ、あの、とてもお疲れだったように見えたので……。余計なことをしてしまい、申し訳ありま

せん」

消えそうな声で呟く。すると、加藤室長はおもむろに口を開いた。

「先日、板尾リーダーにもチョコレートを渡していましたよね」

とても落ち込んでいたから渡したのだけど、まさかそこも見られていたと思わなかった。

「チョコレートなんかで元気になってもらおうと考えるなんて、幼稚ようちですよ」

苦笑いしながら私が言うと、部屋の空気が一瞬変わった気がした。

「男は優しくされると弱い。チョコレートでも他のものでも関係なく、気にかけてくれると心が奪われてしまうことがあるのですよ。板尾リーダーがえらく星園さんを気に入っているようなので……すみません。余計なことを言ってしまったって」

加藤室長が、私と板尾リーダーのことをそんなふうに見ていたとは意外だった。驚いて目を瞬しんかせると、加藤室長は耳を真っ赤にして眼鏡を中指で上げる。

「星園さんは純粹で無邪気なところがあるので、親心で心配してしまいました」

「えっ？」

……親心って。なにそれ、変なの。

私はおかしくなって笑ってしまう。

クールな加藤室長と言われているけれど、今の発言、お母さんみたい。

「加藤室長って、いい人ですね」

「はい？」

「あまり無理しないでください。糖分を取ると少し体が楽になるので、もしよければどうぞ。では、失礼します」

明るく挨拶して、私は室長室を後にした。

家に帰る途中、私はずっと加藤室長のことを思い浮かべていた。

いつもはクールで冷静な加藤室長だけど、時々優しい笑みを見せてくれたり、さっきみたいに少し変なことを言ったりする。毎日、彼の新たな一面を発見できるのは、正直かなり嬉しい。

九歳も年下だと恋愛対象外だろうか。……いや、そもそも、加藤室長は部下をどうにかしようなんてきつと考えないと思う。

どうして自分の心は、こんなにも加藤室長に支配されてしまっているのだろう。

帰り道、ビルの間から見える狭い夜空を眺めながら、私はまた小さな胸の痛みを覚えるのだった。

次の日は休日だったので、私は朝から出かけることにした。

おしゃやかな街並みを歩いたり、ネットで評判のカフェでお茶をしたり。

ほとんどの友人が札幌にいたため、一人で出かけるなければいけないのがちょっと寂しいけれど、東京には楽しいものがいっぱいある。

今度、東京タワーを見たい。展望台に行つて東京の景色を眺めたいな……

それに、古い商店街にも行つてみたい。

慣れたら新幹線で愛知とか大阪とかへプチ旅行したい。

次から次へとやりたいことが溢れてくる。

仕事は大変だけど、楽しみが多いので張り合いがあるのだ。

すっかりリフレッシュした私は、アパートの近くのスーパーで一週間分の食材を買つて、家に戻ることにした。

平日は忙しくてなかなか料理をする時間がないので、作り置きできるものは作つて冷凍しておく。そうすると温めるだけで食べられるから便利なのだ。

特売品を選びながら材料を購入して、エコバッグに詰めてスーパーを出た。

もう少しで家に到着するという時、私の隣の部屋のドアが開き、反射的に隠れた。引越してから大分経つたが、未だに例の隣人の姿を目にしたことはない。

どんな人が出てくるのだろうと、私はゴクリと唾を呑み込みながらこっそり盗み見る。

「……どうということ？」

心臓が止まるかと思った。驚きのあまり呼吸することを忘れてしまう。

隣の部屋から出てきたのは——加藤室長だった。

見間違えていないかと何度も瞬きするが、間違いない。

グレーのロングコートを着ていて、いつもと同じ銀縁の眼鏡をしている。

駅のほうに向かって歩いていく加藤室長の背中を、物陰に隠れたまま見送つた。

夢であつてほしい。

女の人を取つ替え引つ替えしていた隣の人が、加藤室長だったなんて信じられない。